

バウム・テストの「杵」の作用についての検討

— 青年期の環境適応状態との関連から —

19010FRM 堀場 莉加

I. 問題・目的

臨床現場では、治療者はいくつもの杵が存在するなかでクライアントと関わるため、杵の機能が与える認識や効果への理解は非常に重要である。杵には、内面的、隠された欲求や思考、攻撃性、幻想、内実な面を表現する保護し解放する作用と、外面的、防衛的、虚栄的な面を表現する制限し拘束する作用とがある(中井, 1970; 中井, 1974)。

描画法において、描画の理解には特徴から短絡的にパーソナリティに結びつけるのではなく、描画過程と描画体験に注目する描画への接近が重要視されている(近藤, 2011; 三上, 1995)。本研究では、描画体験に与える刺激の道具要因の1つと考えられる杵に着目する。描画における杵の作用に関する研究では、臨床群と健常群ともに保護作用が与えられ、前者では適応的な変化、後者では自己と他者や環境との精神的葛藤の表現を促すこと、そして、制限作用として働くときには、杵によるはみ出しの抑制的効果が示唆されている(森谷, 1983; 沼田・小林・大館・石井, 2016)。ここから、杵の作用は環境への適応によって、大きく変化するものであると考えられるだろう。

しかし、森谷(1983)が対象とした大学生は、健常群であったと言えるのだろうか。というのも原田(2010)によると、青年期では、繊細な傷つきを抱えながらも現実の自分を越えた高い理想を持ち、行動しようとする自己と、自我の統制の範囲内で現実的に行動しようとする安定した自己との間での自己像の揺れ動きが生じる。この自己状態の在り方によっては、臨床群のように、杵による保護作用から適応的な変化をもたらされる者もいるのではないだろうか。したがって、個人の適応状態を示す指標である適応感に着目することで、杵による作用への理解がより深まるのではないかと考えた。

本研究では、杵の作用を捉える方法としてバウム・テストを使用する。バウム・テストは、描画者の自己像や外界との関係を投影し、また、描画内容が同一であるため形態の変化を比較検討しやすく、外へ拡大展開していく木の性質と杵の力動的な相互作用が杵への接近や回避、反抗、順応などが表現されやすい(藤岡・吉川, 1971; 加曾利, 2004, 高橋・高橋, 1986)。本研究においては、空間使用量、幹、根と地面の指標を用いた。

以上のことから、本研究では、個人の主観的な環境適応状態の程度によって杵が与える作用が、どのようなバウムを表出させるのかについて検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査協力者: A 大学に在籍する大学生及び大学院生 26 名に依頼し、質問紙及び面接調査双方の協力が得られたのは 17 名(平均年齢=21.8 歳, $SD=1.98$)であった。

2. 調査内容: 質問紙調査及び Web での質問調査では、青年用適応感尺度(大久保, 2005)、自己概念尺度(長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1967)、フェイスシートで構成される質問紙を実施した。なお、自己概念尺度は、事例の中で自己概念を理解することを目的に補足的に用いるため統計的には使用しない。面接調査では、バウム・テスト(2枚法)、描画後の質問(以下、PDI)、杵に関する質問の順で実施した。

III. 結果

バウムの分析は、 χ^2 検定とフィッシャーの正確確率検定を使用した。統計的に有意差がみられなかったため、数値から読み取ることとした。

1. 環境適応状態: $M=102$ 点であった。平均値を基準とし、環境適応状態低群(以下、低群) 8 名、環境適応状態高群(以下、高群) 9 名とした。

2. バウムの空間使用量: 杵無において、空間を縦

に2等分した区域では、高群では左寄り、低群では中央に描写する者が多い傾向、空間を12等分した象徴性では、用紙右側下方の使用が高群では杵有で多い一方、杵無で少なく、低群では杵有で少ない一方、杵無しで多い傾向がみられた。

3.幹：低群において、杵無では幹の幅が細くなり、杵有では幹への描き込みが多い傾向がみられた。

4.根と地面：杵無における地面の描写が、高群では少なく、低群では多い傾向がみられた。

5.事例：杵に関する面接回答から、保護作用、制限作用、両作用に分類した結果、高群では9名中9名が制限作用、うち2名は保護作用も同時に与えられ、保護作用のみが与えられた者はいなかった。低群では、8名中4名が保護作用、2名が制限作用、2名が両作用を与えられていた。

IV. 考 察

1.環境適応状態高群

1.1 パウムの特徴：額縁やルールに収まる（治まる）という制限作用における体験は、描画者自身を抑制させる状態になるため、杵がある環境では、現実との関わりに対する混乱が生じ、環境や周囲への接触やエネルギーの活発さに欠けるパウムが表出された。一方、杵が外された環境では、地面の消失とそれに伴うPDIにより、パウムの成長を妨げる描写と発言がみられたことから、心理的地位の不安定感や外界への不信感により、現実適応の困難さがみられるパウムが表出された。

また、杵が制限として作用するなかで、杵からはみ出すパウムが表出されない傾向があったのは、描画者の杵を意識づけるという自我機能によって高まる心的エネルギーを集約していきながら自己として構成する力が働いていたからだと考えられる（沼田他、2016）。

1.2 事例：群内最大得点であった描画者では、杵が外されることで拘束から解放される体験をしており、その体験の中で外界へ積極的に働きかける、自我のエネルギーや目標や願望の鮮明化、他者に対する好意が充足していることを象徴するパウムが表出された。一方、最小得点であった描画者では、杵が外されることでこれまでの外界や自分への対応の仕方が機能しなくなることへの

不安や動揺を感じる体験をしており、杵横からの樹冠のはみ出しや幹の根元よりも高い位置にある地面、不格好な枝が描写され、現実環境に圧倒され、不適応な状態や抵抗感のない従順さを象徴するパウムが表出された。

2.環境適応状態低群

2.1 パウムの特徴：囲いにより侵入を防ぐという保護作用における体験は、杵がある環境では、依存性を象徴するパウムが表出された。一方、杵が外された環境では、地面が不活発や混乱、恐怖を象徴する右側下方の空間に描写されたことから、自らが主体的に動く姿勢が求められる現実環境との関わりや投げ所がうまく機能できていない、心理的自立の未獲得を象徴するパウムが表出された（山上、2020）。また、外界への働きかけにおける自我の拡張性と、情緒の深さを象徴する幹の幅が細くなったことから、感情機能がうまく発達していないため、外界との繋がりが表面的であり、外界への共感性に欠けるパウムが表出された。

2.2 事例：群内最大得点であった描画者では、母親を象徴した杵が外されることで、外界からのエネルギーの取り入れを抑制し、不安や自主性を欠いている状態が示され、母親に対する依存性や強い影響を受けていることを象徴するパウムが表出された。一方、群内最少得点であった描画者では、自身を制約する杵が外されることで、幅の狭い幹や幹と隔たれた枝の描写がみられ、感情機能がうまく発達していないことから、自身の感情に基づいて行動することができず、状況に依存し、共感性に欠けるパウムが表出された。

3. まとめ

本研究において、杵の作用により、適応感の高い描画者では、森谷（1983）の自己と他者や環境との精神的葛藤の表現が、適応感の低い描画者では、沼田他（2016）の適応的な変化が促された。このことから、健常群や臨床群という客観的な指標だけではなく、生活史や生活環境などの個人の主観的な指標にも目を向けることが重要であり、その上で杵が何を象徴し、なぜその作用を働かせたのかについて考えることが、杵付けされた空間に対する理解へ繋がると考える。